

よくわからないことを言っている人がいます。何をしているのかもわからない人がいるとします。

それでもその人のことを考えてあげなさいと、言ってしまったのはどうしてでしょう。いつの間にかとても雨が降っている。そのことにも気づかずに、私はよくわからないことを考えています。

その人は私のことをどう思っているのでしょうか。わかりません、わかりません。

私は今でも空を見上げています。私は今でも海を見つめています。私は今でも森を見つめています。私は今でも山を見つめています。

どこにでも転がっているような小石を見つめて一言。

どこも蒼く碧く紅く赤く、どれも綺麗だ。

そう言って、よく見れば、と。

時々のように思い出します。

時々のように何かを手にします。

それほど大切なんでしょうか。その手には手のひらサイズの子供がいました。どこかで見つけたような、大切なものがありました。

そして忘れました。どうして？ と。

何かを見つめている私。何かを忘れてしまった私。何かを失ってしまいました。どこにも転がっている。そんな私。

雲間に突き刺さる光が神々しく感じる。

それが嬉しくて嬉しくて仕方ありません。変革的実践を行いました。忘れました。時々のように思い出します。

時々のように何かを手にします。

思い出は時に過ぎ去るだけのものです。

想い出は刻に未来に刻みつけ。

笑いたければ笑えばいい。

そして思い出せばいい。

世界の真ん中にわたしだけしかないのだから。

はっはっは。

うふふふ。

ひっひっひ。

心に突き刺さる哀愁の香り。

人を望む一人の人。

何も為し得ぬと心に教える子供。

全てが狂っている。

全てが正しいはずなのに。

全てが間違っている。

だから。

全てが苦しく。

全てに喜びを見出せ。

あつはつは。

おっほっほ。

そうかそうか。

天神は答えた。

「吾に望みを持つものよ」

天使は答えた。

「私に望みを持つものよ」

死神は答えた。

「阿古に望みを持つものよ」

どのものもこう答えた。

人とは全てを創りし者なのか？

聖書は答えた。

「人は神と同格」

経典は答えた。

「人は天と同格」

言霊は答えた。

「人は死と同格」

どの神仏も答えた。

人を尊敬すべしことはできぬ。

人は愚かな者なのだろう。私にはわかりません。そこまで高尚な考えはできません。

ですが、私は貴方という存在を求めているのだと知ったら、何を知っているのだろうか。わからないのです。全く。

そしてあなたも全てを失いました。私は何をしているのでしょうか。

私はこの世にあるものを全てに呪いをかけたかった。

そして答えに在る者は。

それが答えなのだと。

愚かな者はそうして失いました。私という人格は全てを失いました。

そして。

「おおい。どうしたんだ？ そんな暗い顔をしちやつてさあ。もつと明るくいこうぜ」

私の悩みを知っている人がよく私にそんなことを言っていました。そして笑っていました。

喜んでいえるのかのように私に声をかけました。そして笑っていました。楽しそうに楽しそうに。

その全てを知っているかのようなその表情に憧れの感情を抱いたのは気のせいではありません。そしてこれからもそんな明るい表情に励まされてしまうのは気のせいではありません。だからついていくことにしました。

「ありがとう。いつも私のこと見てくれているだね」

「そうだなあ。見てはないけど、感じてはいるよ?」

あなたのことがやっぱり気になるからねえ。

そんなことも私から返したら笑われるのでしょうか。

わかりません。

諸君らよ。

悩みを持つものは必ずしも、それから解き放たれるものではないことが伝わったであろう?

この世に衆生がある限り、煩惱は在り、解決されるものではないのだ。

人は愚かだ。悩み、苦しみ、そして地獄へ。

死神が喜ぶのだ。煉獄の主が喜ぶのだ。

世界は苦しみの下。

其れが当たり前。

そしてこれから、この世界が終わっても。

苦しみから始まり、苦しみに終わるのだ。

これが、世界の正体だ。

だが、救いはある。

先ずは苦しみを自覚することから全ては始まるのだ。

そしてその後、全てを失う。

その先に未来と幸せがあるのだと。

信じなさい。

信じ、そして。

自然に身を任せよ。

さすれば道は開かれん。

さあ。

我が手を掴め。

その道へと行こうではないか。

そして、その道の先にある、幸せへと。

行くのだ。

好くのだ。

世界の中枢点へと。

——行くのだ！